

ふるさと見て歩き

第51回

土手稲荷神社

◇水害の度に流された神社

山方地域小貫地区の岩上江西集落は、久慈川左岸に広がる水田地帯です。この堤防沿いの水田の中にひときわ印象的な朱色の社殿が建っています。これが土手稲荷神社です。

ある小貫地区は、久慈川が大きくS字状に湾曲する内側に位置するため、水害に見舞われやすい土地でした。そのため古くから各所に水神が祀られてきました。



▲現在の土手稲荷神社

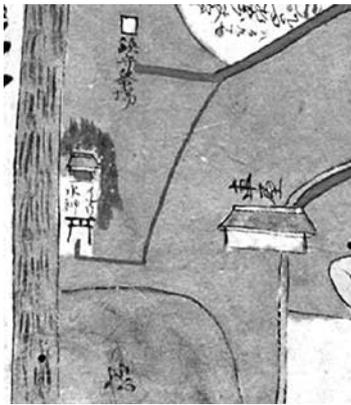
今回ご紹介する土手稲荷神社も江戸時代以来、水害を鎮めるために祀られてきた水神です。

祭神は稲荷神社の主神、宇迦之御魂大神と、水神としても祀られる弁財天（弁天さま）です。

江戸時代の後半、一八五〇年頃に作られた絵図面「小貫村田島実地絵図」には、沼のほとりに土手稲荷神社が朱塗りの社殿で描かれていて、「イナリ 水神」と記されています。稲荷神社と水神を合祀したのは明治四十年代と言われていますが、江戸時代の絵図ではすでに同じ社地内に祀られていたようです。

この時は現在の社寺である岩上江西集落（以下現社地）よりも北の石倉道西集落（以下旧社地）に所在していました。現在地では、小貫地区の久慈川左岸の堤防の北端付近にあたると推定されます。現社地と、推定される旧社地の距離は二百メートルほどです。

旧社地から現社地への移動は、明治四十年代に入り、久慈川に堤防を築いた時のことです。



▲江戸時代の絵図に記載される土手稲荷神社

その後、大正九年（一九二〇）の洪水で社殿が流され、それからわずか二十年後の昭和十三年（一九三八）の水害時にも社地もろとも流されてしまっています。集落住民にも大きな被害が出て、復旧にも多くの時間と労力がかかりました。社地を流された土手稲荷神社は、被害の小さかった旧社地付近の堤防上に移されて復旧を見守りました。

堤防は順次、南に向かって築かれ、昭和十六年頃には元の土手稲荷神社の南側まで到達しました。土手稲荷神社は現社地の西側の堤防上に還ることができたのです。

しかし、同年には土手稲荷神社の南の岩崎江堰付近で二カ所が決壊、神社は流されずに済んだものの、集落は再び浸水被害に見舞われしました。築堤を中心とした復旧事業が進む中で、それを阻むかのような水害の到来は、水神への住民の信仰を一層篤くしていったのかもしれない。

こうしたなか、水害や砂利採取で荒れてしまった土地を整備するため耕地整理が始まり、昭和六十二年に完了しました。この時、もともとの神社の土地が堤防の内側に入ってしまったため、堤防の外側の平地の一角を現社地として、現在に至っています。

◇土手稲荷神社のお祭り

土手稲荷神社では年に三回の祭りが行われています。



▲土手稲荷神社の旧社地と推定される場所。久慈川の堤防の北端

二月初午と八月の盂蘭盆、十一月十五日の例祭で、初午と例祭は日中に行われ、盂蘭盆は夕方から夜にかけて行われます。一年交代で回ってくる氏子惣代が祭りを取り仕切ることになっています。

祭りでは氏子惣代や役員たちが社殿で神事を進め、参拝してくる地域住民に御神酒を授けるなどの接待をし、歓談して過ごします。

次号では土手稲荷神社の社殿横に並ぶ石造物についてご紹介します。

※檜山正明さん、美知子さん、成里人さんに聞き取り調査にご協力いただきました。

歴史民俗資料館大宮館 ☎52-1450